
かざしたその手に未来を掴んだ

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かざしたその手に未来を掴んだ

【Nコード】

N2182B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

バレーに人生をかける男の子の挫折と悔しみ。守る者ができたから、俺は前に進みたい……。強気なあなたが好きだから「そう言ったのは、マネージャーだった。スポーツにかける青春ストーリー」。

「くそっ……!」

なんで?!

なんで俺がこんなブロックごときに……

「堀!スパイクくるぞ!」

「おう!」

拾いに行っただけ、正面から少しずれてただけなのに拾えない。

「なっ……」

こんななんでもないスパイクまで拾えないのか……
いつもなら簡単につないでるとこじゃねえか。

「珍しいな堀、お前がミスるなんてよ」

「次は拾いますよ」

ひゃ汗が流れる。

エースをまかされてる俺が、リベロよりもカットを信頼されてる俺が、なにもできない。

「堀!」

「くっ……」

またはじく。

スコアはすでに18 - 13で5点負けてる。

監督がタイムを取る。

レギュラーはコートから出てベンチへ向かう。

「堀、調子悪いのか」

「い、いえ・・・」

なんで打てない？

なんで拾えないんだっ・・・

打てなきゃだめなんだ。

拾えなきゃ・・・だめなのに。

「大丈夫か？堀」

「だ、大丈夫っす」

大丈夫なもんか。

どうして言うことを聞かないんだ？

どうして俺はっ・・・

——2週間前。

「なにー？！堀がケガ？！」

「堀が欠けたら俺らどーすんだよ？！」

無理な姿勢からの移動攻撃と、乱れたトスの無茶な処理。

その2つが俺の腰を奪った。

「すみません、キャプテン。みんな。でも試合までにはなおします」

「そうだな、エースがいないんじゃないや困るしな」

「早くなおせよ」
「はい」

そのときは歩くのもままならなかったが、なおらないなんて思っ
てなかった。

一週間もすりやなおるだろうと・・・

確かに一週間後にはなおった。

普通に走れるようにもなったし、医者からも承諾された。

だけど・・・

「あっ・・・」

練習中、ミスの連発。

おかしいと思った。

ミスするようなもんでもねえのに連発するなんて・・・それにフ
ォームがぎこちない。

「堀くん・・・腰かばってない？」

そう口を開いたのは、同じクラスのマネージャー。

「なに言ってたんだ。腰はもうなおってるっての」

「精神的なものよ」

「は・・・？」

「一度けがとかすると、たまにそれが恐怖になるって。堀くんこの
間まで腰けがしてたじゃない」

「だから、怖くて高く飛べない上にカットも構えができないからは
じくってわけか」

「キャ、キャプテン」

マネージャーに続いて言ったのはリベロのキャプテンだった。

「ばかな・・・俺が精神的に負けてプレーができないだと？
腰の痛みが怖くてバレーができないって言うのか？」

まさか。

俺がそんなわけねえよ・・・

いや、だけどほんとになんもできねえんだ。

「まあまだ一週間ある。その間に完成すりゃ問題ねえって」

「は、はい」

だが、その後も完全に戻ることはなかった。

試合までの時間のみがせまってゆく。

比例して焦りが出てくる。

バレー始めたときから持つて生まれたもん・・・背とか筋肉とかは
人よりも上で、スパイクもレシーブもわけないものだった。
だけど頼りのスパイクもレシーブもなくなった。

精神的なもんなんかにはやられてるようじゃ、到底バレーやってるこ
とがちゃんちゃらおかしいってもんだよね・・・

「前衛だ・・・」

ローテーションして、再び前衛に上がる。

はじめてだ。

バレーやってからはじめて・・・

「堀い！いくぞー!!」

「おっしやあ！」

はじめて自分のところヘトスが上がらなきゃ良いのに、と願った。

キャプテンのトスが俺めがけて上がってきた。

「このっ・・・!!」

ブロックの間に打つ。

だがいとも簡単に拾われる。

ラリーの応酬。

何度も何度も俺のとこヘトスが上がる。

ブロックされても仲間がカバーする。

そしてまた俺にトス。

「いけえ!!」

「ぶちぬけっ堀!!」

決めたい・・・!!

みんなが必死につないでくれたこのボール、絶対に決めたい!

なんでも良い・・・たとえ当たりそこなっても良いからとにかく決まってくれ——・・・

「アウトだっ」

敵がジャッチをする。

ホイッスルが鳴り、相手の得点になった。

「アウ・・・ト」

唇をかみしめる。

スパイクが通用しないどころか、仲間にまで迷惑かけるなんて・・・
エースなのに決められないなんて・・・

「堀、ドンマイドンマイ。次もつかい上げ・・・」
「くるな！」

仲間がかけよってくるのを止める。

悔しい・・・

なんもできねえ自分が、なによりも憎い。

涙が落ちた。

見られないように背を向ける。

ユニフォームの袖で拭く。

「ほ、堀・・・」

生まれてはじめての涙だった。

今まで試合に負けたときでさえ流したことがなかった涙。

決まらないことが

バレーができないことが、こんなにもはがゆいなんてはじめて知った。

「こらー堀い！！泣いてどおすんのよっ！！泣いたらスパイクが決

まんの?!」

ベンチからの叫び声。

「あんたのそんな姿見たくない!いつもみたいに自信満々で強気になつてよ!」

「君、やめなさい」

主審がマネージャーに注意する。

マネージャーはこつちを見て睨む。

「あたしはっ・・・スーパーマンなあんたが一番好きなの!」

そう言つて座つた。

んなこと言つたつて・・・

俺だつてどうにかしてえよ。

したいけど、なんにもできねえんだよ。

「・・・俺はもう、前みたいなスーパーマンじゃない」

「だったら、俺らと同じだろ」

「先輩・・・」

「俺らはお前みたいに打てねえけど、それでもアタッカーである誇りは捨ててねえぞ」

その言葉にはつとした。

そうだ、みんなだつて同じなんだ。

みんなは俺みたいにワンマンじゃないけど、こんなにがんばってるじゃんか。

なのに俺・・・

「・・・はい！」

涙を拭いて、ポジションへ戻る。
そして、ベンチのほうを向く。

「おいジャーマネー！今はスーパーマンじゃねえけど絶対スパイク決めてやらあ！」

「堀くん・・・」

マネージャーはにつこりと微笑んだ。
そして、試合に戻る。

なかなかスパイクは決まらないけど、レシーブのミスもするけど
けどやっとそのおかげでみんなの気持ちがわかって、俺は一步前に
進めた。

俺はみんなよりもデカイし、パワーもあるから決めてあたり前のエ
ースだけど

今はもうそうじゃないから。

だけどみんなが俺を支えてくれるから。

打てない俺だけど、打たそうとしてくれるから。

俺を・・・信じてくれるから——・・・

「おつかれっさーん」

「いやぁ勝った勝ったー」

「あぶねえとこだったな」

試合が終わる。

結局俺らがフルセットで勝った。

「なんだよ」

俺はマネージャーの視線を感じてそう言う。

「さっきまで泣いてたやつがこんなに元気になるとはねー」

「ほっとけ」

「素直じゃないなあ」

俺は立ち止まる。

「どうかした？」

照れくさいけど

ばかにされそうだけど、言う。

「・・・お前の言葉、きいたぜ。さんきゅ」

「やだー！ 恥ずかしいこと思い出させないでっ！ー！」

「俺もお前のそんなところっこー好きだぜ」

「えっ」

はやくこの精神病なおさんにやいかな。

いつもこうやってずるずると勝てるわけじゃねえんだ。

守りたい仲間できたから

あいつがスーパーマンを好きだって言うから

そしてなにより、もうこんな悔しい思いしたくないから

だから

「おーし、帰って練習すつぞ！」

だから

俺は今日も走り続ける。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2182b/>

かざしたその手に未来を掴んだ

2011年1月15日02時28分発行